

工業高校における生徒の自己概念と自尊感情との関連性 —1年生を対象とした調査から—

大分大学教育福祉科学部 ○島田和典, 市原靖士
兵庫教育大学連合大学院(院生) 阪東哲也

1. はじめに

本研究の目的は、工業高校における生徒(以下、工業高校生とする)の形成する自己概念と自尊感情との関連性を検討することである。

工業高校は、我が国の中堅技術者の育成を目的に、これまでに多くの実践技術者を輩出している。一方、不本意入学や中途退学者の問題等、工業高校での学校生活に十全的に参加できない生徒の存在が大きな課題となっている。その原因の一つとして、生徒が工業高校に学んでいる現実の自己像を適切に将来の自己像と結び付けられていないことがあげられる。このような自己像、すなわち生徒が自分自身をどのように捉えているかという認識は自己概念(Self-Concept)と呼ばれている。筆者らはこれまで、工業高校生の自己概念が、F1 自律志向性、F2 キャリア志向性、F3 専門的能力志向性、F4 社会的価値志向性、F5 自己モニタ志向性の5因子によって構造化されていることを明らかにしている。また、前報では、入学段階において形成する意識群が、自己概念形成へ影響する知見を得ている¹⁾²⁾。

一方、自尊感情について、池田は「自分に対する誇りや自分を価値ある存在と思う気持ちのこと」と定義し、自己概念との関連性(特に正の評価)を指摘している³⁾。自尊感情の研究は、これまで心理学の分野を中心に多くの研究が見られるが、その中でも学校教育との関連性は深い。人権教育、道徳教育、体験活動等の場面で、自尊感情を「高める」または「育む」といった表現がしばしば用いられている。一般的に、自尊感情は高低で表現され、学校教育によって生徒の自尊感情を高めることが求められている。Rosenberg(1965)は、自尊感情を測定する尺度を開発し、我が国でも山本らによって翻訳されている⁴⁾。

そこで本研究では、工業高校生の形成する自己概念と自尊感情の関連性を明らかにすることとした。

2. 方法

調査対象：平成24年4月に入学した大分県、大阪府、鳥取県の工業高校生737名。

手続き：調査は、1年生学年末の平成25年2月～3月に工業高校における生徒の自己概念尺度(筆者ら、2007)及び自尊感情尺度(Rosenberg：山本ら訳、1982)を5件法実施した。

調査後、自己概念の形成状況によって上位群・下位群に分類し、両群の自尊感情得点を確認した。その上で、1年生の学年末段階における自己概念が、自尊感情に与える影響を検討した。

3. 結果と考察

調査の結果、有効回答は684名、有効回答率92.8%となった。

3.1 自己概念の形成状況による自尊感情の差異

分析にあたり、1年生の学年末段階の自己概念について、対象者それぞれにおける自己概念を構成する5因子の因子別平均値を合計し、自己概念全体の値を算出した(算出方法は筆者らの先行研究⁵⁾を参考にした)。この得点が満点25点に対し平均値17.32(S.D. 2.70)であったことを考慮し、平均値以上を自己概念上位群(n=345)、平均値以下を下位群(n=339)と設定した。

その上で、自己概念上位群・下位群それぞれの自尊感情の尺度得点を集計し、一元配置分散分析を実施した。その結果、表1の通り、有意な差異が認められ、上位群が下位群より高い自尊感情を形成している傾向が明らかになった。

3.2 自己概念5因子群が自尊感情に与える影響

具体的な影響力を検討するため、上位群・下位群それぞれに対して、自尊感情得点を基準変数、自己概念5因子の尺度得点を説明変数とする重回帰分析を実施した。その結果、有意な重相関係数(上：R=0.37、下：R=0.47、 $p<0.01$)が得られ、

